ポケットモンスター　真実を求めて

プチシュー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年、アオトが初めて見たポケモンバトル。

そこで闘っていたトレーナー、リョクトに憧れてアオトはポケモントレーナーを目指して旅に出るがある日リョクトが消息を絶ってしまう。そして少年はリョクトを探す道中であるトラブルに巻き込まれてしまいそこから物語の歯車が回りだす。

※更新は不定期となります。

※ご指摘などありましたらよろしくお願いします。

目次

1話　憧れ　1
2話　あの時から今まで　4
3話　異変の森　7
4話　追われる者　11
6話　メガシンカと再会　14

1話　憧れ

ミシロタウンとコトキタウンの間にある草むらで二人のトレーナーが今まさにポケモンバトルを始めようとしていた。
片方のトレーナーが繰り出したのは全身が黄色で二本の腕に黒い線のような模様があり尻尾が二本あるホウエン地方では初めて見るポケモンだった。
「行くぞ！エレキブル！」
「エレキー！」
どうやらエレキブルというポケモンらしい。エレキブルは叫びながらバチバチと電気を体から発していた。電気タイプのようだ。対してもう片方のトレーナーは
「舞え！ジュカイン！」
「ジュカー！」
ホウエン地方で新人トレーナーのパートナーになるポケモン、キモリの最終進化態のジュカイン。相性では草ＶＳ電気。相性面ではジュカインの方が有利だがエレキブルがどんな技を使うかによっては勝負は分からない。先に仕掛けたのはエレキブルだった。
「エレキブル！お前の十八番でご挨拶だ。１０万ボルト！」
「こうそくいどうで避けろ！」
ジュカインのトレーナーもすぐに指示を出しエレキブルの攻撃を躱した。
「やるな！なら今度は電撃波だ！」
エレキブルの電撃波は高速で動くジュカインに命中した。
「必中技か！面白い！俺たちも行くぞジュカイン！」
「ジュカー！」
ジュカインはそれに応えるように吠えた。
「タネマシンガン！」
「エレキブル、守るだ！」
エレキブルは守るを使ってタネマシンガンを防御、しかしジュカインのトレーナーは攻撃の手を緩めない。

「続けて、エナジーボール！」
「アイアンテールで跳ね返すんだ！」
　エレキブルは二本の尻尾を器用にエナジーボールを跳ね返した。ジュカインは跳ね返ったエナジーボールを躱した。
「なら今度は接近戦だ！ジュカイン、リーフブレード！」
　ジュカインはリーフブレードを出してエレキブルに向かっていった。エレキブルのトレーナーは待ってましたと言わんばかりの表情を浮かべ
「お前の力を見せてやれ！カミナリパンチ！」
　エレキブルもジュカインに向かって走り出した。トレーナーの表情から察するにこのエレキブルは近距離戦つまり物理系の技が長けていると感じ取れた。もしかしたらこのエレキブルの一撃で勝負が決まるかもしれないと考えているとジュカインのリーフブレードとエレキブルのカミナリパンチがぶつかろうとしていた。その時。
「ジュカイン、バックステップ！」
　その声と共にジュカインは一歩後退をした。エレキブルは突然ジュカインが下がった事についていけず振りかぶってしまった。
「なっ！」
「そこだ！リーフブレード！」
　その隙を逃さずエレキブルにリーフブレード。エレキブルは防御する事ができず吹き飛ばされて倒れてしまった。一瞬の出来事でエレキブルのトレーナーはぽー然としていたがすぐにエレキブルに声を掛けた。
「エレキブル！頑張れ！立つんだ！」
　エレキブルはそれに応えようと体を震わせながら何とか立ち上がった。しかし先ほどのリーフブレードをまともに食らったせいか息遣いが荒い。かなりのダメージを受けたのは明白だった。
「やるね、君のエレキブル！今の攻撃は並の電気ポケモンなら一撃なのに、まさか耐え切るなんて！」
「俺のエレキブルは色んなポケモンとのバトルを経験してるからな！並の電気ポケモンと考えてたら痛い目みるぞ！」

「そうみたいだね。君のエレキブルのカミナリパンチあのまま受けていたら多分僕のジュカインの方が吹き飛ばされていたよ。でも…これで最後の攻撃だ。ジュカイン！」
　ジュカインはその声を聞くと尻尾に光を集め始めた。エレキブルのトレーナーはすぐに何をしようとしてるのか察した。
「エレキブル！それを撃たせるな！かみなりだ！」
　エレキブルから放たれたかみなりはチャージ中のジュカインに命中したが…チャージは止まらない。
「止まらないだと…」
　いくら効果が今ひとつだとしてもエネルギーのチャージの阻止出来なかった事にエレキブルのトレーナーは驚きを隠せなかった。
「よく頑張ったジュカイン！放て！ソーラービーム！」
「エレキブル！躱せ！」
「遅い！」
　エレキブルはソーラービームを躱すことが出来ず衝撃によって再び吹き飛ばされてしまった。
「エレキー」
「エレキブル！」
　エレキブルは地面に二回ほど叩きつけられ目を回しながら草むらで倒れた。
「僕の勝ちだね、お疲れ様ジュカイン。」
　そう言ってジュカインのトレーナーはジュカインを戻し僕をみて
「どうだアオト？これがポケモンバトルだ！」
　このバトルが僕をポケモントレーナーになるきっかけになったのだ。

2話　あの時から今まで

俺はライブキャスターからのアラーム音で目が覚めた。
「懐かしい夢だったな。」
俺は体を起こし夢で見た3年前の自分を思い出した。
あの時の俺はホウエン地方にいる兄、リョクト兄さんに会いにミシロタウンに行った。そしてリョクト兄さんが生でポケモンバトルを見た事がない俺にポケモンバトルを見せるためにトレーナーを探してコトキタウン近くの草むらまで一緒に行きそこでエレキブル使いのトレーナーに出会ったのだ。
テレビでしかポケモンバトルを見た事がなかった俺には一つ一つが新鮮だった。そしてパワー自慢のエレキブルを圧倒したジュカインとジュカインに巧みに指示するリョクト兄さんに俺は衝撃を受けた。
「どうすればそこまで強くなれるの？」
「旅をして沢山経験を積めばアオトもきっと俺みたいになれるぞ！」
その言葉を聞いて俺は旅に出る事を決心した。それから1年後、10歳なった俺は再びホウエン地方に飛んだ。そこで俺は兄にキモリ、つまりジュカインを譲ったホウエン地方のポケモン博士、オダマキ博士を兄に紹介して貰った。何故ホウエンに飛んだかと言うと兄が旅した土地を回りたいという気持ちがあったからだ。
そこで俺は相棒となるポケモンと出会った。ポケモンを貰って旅を始めた俺は色んな経験をした。初めてのポケモンバトル、初めてのポケモンゲットそして初めてのポケモンジム挑戦。そして相棒とも息があったバトルが出来るようになった時、事件が起きた。リョクト兄さんが行方不明になったのだ。始めはまた長期の旅に出たのだろうと思ったが半年も連絡がこず不審に思った俺はリョクト兄さんのライブキャスターに電話をしたが繋がらずそこで行方不明になっている事がわかった。それから俺はリョクト兄さんを探して沢山の土地を回ったが手がかりすら見つける事が出来なかった。そして俺は今オダマキ博士の研究所があるミシロタウンに来ていた。ミシロタ

ウンにはリョクト兄さんの家もあり、もしかしたら戻ってきた形跡があるかと思ったがいつも通りのままだった。そしてミシロタウンに来たもう1つの用事が家に行く事をオダマキ博士に連絡した時に頼みたい事があるそうだ。それで昨日はここで一泊してこれからオダマキ博士に会う予定だ。

「今の時間は…5時15分か…博士はまだ寝てるよな。」

アラームを早くセットし過ぎたせいで会うじかんにも朝食の準備にはかなりの余裕があった。そして俺は朝食の用意を始めた。朝食といっても昨日来る前にかったパンと珈琲だけだ。用意にはさほど時間がかからなかった。そしていざ食べようと朝食を外にあるテラスに移動させるとテーブルの上にあった2つのボールの内の1つがコトコトを動いている。ボールを手に取り、

「起きてたのか?出てこい!」

「ラグラー!」

ボールからは俺の相棒ラグラージが元気よく飛び出してきた。ラグラージはオダマキ博士から譲って貰ったミズゴロウが進化した姿。本当はオダマキ博士からポケモンは貰わず、リョクト兄さんがポケモンを捕まえるのを手伝ってくれるって話だったが研究所を訪れた時にミズゴロウが俺に向かって突進してきたのがきっかけで譲ってもらう事になった。何でもこの時のミズゴロウはなかなかトレーナーが自分を選んでくれなくて焦っていたそうだ。それで俺をポケモンを貰いに来た新人トレーナーだと勘違いして元気がいい所をアピールしようと突進してきたってのがオダマキ博士の見解だった。

「真っ直ぐな所がアオトにそっくりだな!最初のポケモンはそのミズゴロウでいいんじゃないか?」

「そうだね。ミズゴロウも君を気に入ってるみたいだしどうだいアオト君?」

って感じで俺はミズゴロウを譲って貰った。最初はミズゴロウとの旅に不安があったが沢山のバトルを積み重ねて俺もミズゴロウもお互いを信頼し会うようになりそして今に至る。俺はポケモンフーズと昨日来る前に近所の森で収穫したモモンの実をラグラージに出

した。
「ラグラ～☒」
ちなみにラグラージはモモンの実が大好物。好物が出てラグラージはご機嫌なようだ。
「ゆっくり食べろよ？それじゃ頂きます！」
それから俺たちは朝食をのんびりと楽しんだ。

3話　異変の森

朝食を食べ終わった後、ライブキャスターから着信音聞こえた。ディスプレイにはオダマキと載っていた。時間はまだ6時過ぎ。

珍しいな、朝のフィールドワークにでも行ってたのかな…

「もしもし？朝からなんですか博士？」

「おぉ！アオト君、起きてて良かったよ。」

画面に映る顎髭がトレードマークのおじさんがオダマキ博士。少々頼りない印象があるが一応ホウエン地方を代表するポケモン博士である。

「たまたまですよ。それで朝早くかはどうしたんですか？」

「あ、そうだった。実は今トウカの森にフィールドワークに来ていたんだけど森の様子がおかしいんだよ。」

「おかしい？どんな風に？」

「今、森の入り口にいるんだけど森のポケモン達が慌てて森から出てくるんだ。あのナマケロ達でさえもね。」

「ナマケロ達もですか…それはおかしいですね。」

ナマケロとはトウカの森に生息するポケモンでその名の通り怠け者のようにあまり動く事を好まず1日の内２０時間を寝て過ごす習慣を持つポケモン。

そんなポケモンも逃げ出すということは森の中では何らかの異常がある事は容易に考えられた。

「だからアオト君、悪いんだけど今からトウカの森に来て原因を調査してくれないか？私も何とかしたいのは山々なんだが生憎私はポケモンを持ってきていなくてね。ポケモンが原因だったらどうしようもないんだ。」

オダマキ博士はトレーナーではなく研究者だ。しかもポケモンも連れてきていないから仕方ないな。

「分かりました。今から向かいます！あとフィールドワークの時はポケモンも連れて行った方が良いですよ、何があるが分からないんですから！」

「返す言葉もないよ……ともかくありがとう。じゃあトウカの森の入り口で待ってるよ。」
そう告げると博士は通信をきった。
トウカの森か懐かしいな…
トウカの森はアオトが旅を始めたばかりの時に通った森だ。そこで初めてポケモンをゲットしたのは今でも覚えている。そんな思い出がある森に異変が起こっている。とにかく早く行かないと。
「戻れ、ラグラージ。」
俺はラグラージをボールに戻し、机の上にあったもう1つのボールを手にとった。
「出てこい、ムクホーク!」
「ムクホ〜ク!」
俺の二匹目のポケモン、ムクホーク。特徴は頭の鶏冠が大きく垂れ下がっている所である。主な生息地はシンオウ地方でありシンオウ地方に広く分布するムックルというポケモンの最終進化系である。アオトが初めてゲットしたポケモンであり何でトウカの森にいたのか分からないポケモンである。
「ムクホーク、今からお前の故郷トウカの森に行くぞ!」
「ムクホ〜♪」
ムクホークはご機嫌な声を上げ俺を背中に乗せて大空に飛び立った。やはり故郷に行くのが嬉しいのだろう。

そしてムクホークに乗って暫くするとトウカシティが見えてきた。
「ムクホーク、もう少しだ!少し急ぐぞ!」
「ムクホ!」
ムクホークは一気に加速してトウカの森に向かった。そして森が見えた。森の近くに着くとオダマキ博士の姿が見えた。俺はムクホークに高度を落とすよう手で指示して博士のすぐ目の前に着地した。
「よし、ありがとうムクホーク!」
俺はムクホークから降りた。博士はずっと考え事をしているのか

こっちの存在に全く気付いていない。
少しイタズラしたいな…
俺は博士を指差して、
「ムクホーク…鳴き声…」
小声でムクホークに指示。ムクホークも意図を理解したのだろう。
無言で頷き博士のいる方を向いた。そして、
「ムクホーーーーーク！」
「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！んが………」
博士は何が起こったか理解出来ず飛び上がってそして上手く着地出来ず地面に頭をぶつけて倒れてしまった。
あ…やりすぎた…
倒れた博士の顔を覗くと白目をむいていた。手で何回も顔をビンタしても何度呼びかけても全く起きる気配がない。こうなると水でもかけるくらいしないと起きる感じがしないが近くに川などは存在しないし…うん？み…ず………水か！
「ラグラージ、博士の顔に軽めのみずてっぽう！」
ラグラージを出して蛇口から水を出す程度勢いの水を博士の顔に浴びせた。
「わぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
博士は大声をあげて目を覚ました。そりゃ水をかけて起こされればこうなるか。にしても博士は声がデカイ。だから娘がなかなか旅から帰ってこないんだ。いびきがうるさいって…
「おぉ！アオト君、早かったね！ところで聞きたいだけだ私はどうしてラグラージのみずてっぽうで起こされたんだい？何かに驚いた事は覚えているんだが…」
「いや…俺がきた時には博士はもう倒れてましたよ、たぶん森のポケモンが博士にイタズラでもしたのでしょう。」
「そうか…でもムクホークの声が聞こえたような…でもまぁ気のせいか。」
内心ホッとした。いちいち説明するのも面倒だし後でこれの借りって事で何か頼まれるのもイヤだしな。何とかごまかせて良かっ

た。さてと…

「お疲れ様、ムクホーク、ラグラージ戻れ！」

俺は二匹をボールに戻して早速本題に入る事にした。

4話　追われる者

「それで森はあれから変化はあったんですか？」
「あぁ、ポケモンが逃げてくるのは相変わらず何だかアオト君との電話が終わってから森の中で何かが倒れるような音が聞こえてね…もしかしたら森の中でポケモンが暴れているかもしれないんだ。」
「ポケモンが暴れているですか…」
　俺は少し違和感を感じた。トウカの森は広いが俺が知っている限り凶暴なポケモンはいない…むしろ争いを好まずのんきなポケモンが多いという印象がある。その証拠にさっき話に出たナマケロというポケモンが数多く生息している。その事を踏まえてポケモンが暴れていると考えると
「トウカの森に凶暴なポケモンが迷い込んだってことですかね？」
　もっとも高い可能性はそれしかなかった。
「その可能性が高いね。トウカの森にはそんなポケモンはいないし、あ！あとこれを持って行ってくれ…あれどこだ…これじゃない…これでもない……あった！」
　そう言うと博士はバックから片手に持てるサイズの機械を取り出した。
「これはポケモン図鑑。本当は今日呼んだ時に渡そうと思ったんだけど森の中で使う時があるかもしれないから持って行ってくれ。使い方は分かるかい？ポケモンが出てきたときに図鑑を開くとそのポケモンの情報が出てくるんだ。何かと便利だよ！」
「ポケモン図鑑…分かりました、ありがとうございます。じゃあ今から森に入りますから、何かあればライブキャスターで連絡します。」
「分かった。私はここで待っているよ。気をつけて行ってくれ！」
　そうして俺はトウカの森に入っていった。
　森の中はスバメ、ケムッソ、キノココ、アメタマ、ポチエナ、アゲハント、そしてナマケロなどの森のポケモン達が逃げていく以外はいつも通り…いや少しだけ風が強い感じがした。もしかしたら飛行タ

イプのポケモンが関係しているのかもしれない。
そう考えながら森の中を進んでいった。
暫く進むとまるで強風でなぎ倒されたかのような木が現れた。多分これが博士が聞いた音の正体だ。
「これは酷いな。」
木の中には根っこからなぎ倒されているものもありここで起こった何かの衝撃を思い知らされた。木に目立った痕が残っていない事から飛行タイプが関係している仮説は正解かもしれない。しかし木を細かく見ていくうちに鋭利な刀で斬られたような木を数本発見した。
「ポケモンが何者かに追いかけられているのか。」
そう考えれば鋭利な痕があるのも納得出来た。
「ラ…ルト…」
！今小さな鳴き声が聞こえた。声がする方に耳を澄ませるとなぎ倒された木の中から聞こえていた。木を上を移動していくと倒れているポケモンを見つけた。
「大丈夫か！」
俺はポケモンを抱きかかえた。体の傷からしてこの木がなぎ倒される時に巻き込まれたのだろう。体には細かい傷が多かった。確かこのポケモンの名前はラルトスだな。トウカの森にいるのはかなり珍しい。
「ラルトス、すぐ治してやるからな！」
俺はバックに入っているキズぐすりを取り出した。傷の箇所にキズぐすりを吹きかけて包帯を巻いてとりあえずの応急処置は済ませたが一応ポケモンセンターに連れて行った方がいいな…でも今は行く時間がない…
悩んだ末に俺は1つの解決方法を見つけた。
「なぁラルトス、俺はお前をポケモンセンターに連れて行きたいんだけど今すぐは難しいんだ…そこでなんだけど俺のバックに入って俺と行動して俺の用事が終わったら連れて行きたいんだけどお前はどうだ？」

そう言うとラルトスは頷いた。
「よかった！ありがとう、ラルトス！」
俺はそう言ってラルトスの頭を撫でると顔の部分が赤くなっていた。
うん？顔が赤いな…。これは早めに原因を突き止めてポケモンセンターに行かないと…
俺はラルトスをバックに入れて森の先に進んでいった。ちなみにラルトスはバックから頭を出した状態で移動している。
「苦しくないか？」
「ラルル～☒」
「ならよかったよ。」
ラルトスは首を横に振りながらご機嫌な鳴き声で返事をした。入り心地が良くて良かった。そして木がなぎ倒された道を暫く進むと木が倒されていない部分に出た。
「ここで見失ったのかな…」
辺りを見渡しても木や草むらばかりで手がかりらしい手がかりは何もなかった。ここで調査をやめてこのまま来た道に引き返そうとした時ラルトスが急にバックの中で動き出した。
「ラル、ラル！」
「どうした、ラルトス？」
ラルトスは左端にある草むらを指した。
「あそこに何かあるのか？」
「ラル！」
ラルトスは返事をして頷いた、ラルトスの指した方向に進むと草むらの裏に初めて見るポケモンが傷だらけで横になっていた。そしてそのポケモンはこちらを気付いて鋭い目で睨んでいた。
「このポケモンは…」
さっそくさっき貰ったポケモン図鑑を開こうとした時、頭の中に声が響いた。
「人間！さっきの奴の仲間だな！私は簡単には捕まらんぞ！」
その声が響いた後、謎のポケモンは立ち上がった。

6話　メガシンカと再会

「ピジョッ～ト！」

何が起こったのか俺には理解出来なかった。光が消えたと思ったら空を飛んでいたピジョットが別のポケモンの姿をしていたからだ。体のベースはピジョットなのだが顔にムクホークより細い鶏冠が垂れ下がっていて頭の後ろにも長い髪の毛のようなものが伸びていた。ピジョットはすでに最終進化系、だから進化したとは考えにくい、が先ほど男が口にしたメガシンカという言葉。突発した情報が多くて頭が全然回らなかった。

「何が起こったのか分からない…のような顔をしているな。確かにメガシンカはホウエン地方には伝わっていない事だから仕方がないか。」

再びメガシンカという単語…

「考えていてばかりでは何も進まないぞ、ピジョット！つばさで打つ！」

「！ムクホーク、お前もつばさで打つ！」

咄嗟の判断でムクホークに指示。再び二匹のつばさがぶつかり合う。つばさがぶつかり合った瞬間ムクホークが弾き飛ばされしまった。俺は驚いた。先ほどまで互角の勝負をしていたムクホークがいとも簡単に飛ばされた。メガシンカ…ポケモンをパワーアップをさせている事は間違いなさそうだ。

「ムクホーク、一旦距離を取れ！ふきとばし！」

「冷静だな。ピジョット離れて躱せ！」

「ムクホーク、はねやすめで体力を回復しろ！」

よし。これで一旦流れを断ち切れた。流れは早めに切らないと飲まれていくからな。今度はこっちの流れに持っていかないと。

「ムクホーク、かげぶんしん！ピジョットを撹乱するんだ。」

「今度はそっちから仕掛けるか…ピジョット…ぼうふうで全て薙ぎ払え！」

ピジョットのぼうふうはムクホークのかげぶんしんを全てを巻き

込んだ。そしてぼうふうは森の木々を次々となぎ倒していった。
「これは…」
　この光景はまさに先ほど見た森の木々がなぎ倒された光景そのままだった。
「森の木をなぎ倒した正体はピジョットの仕業だったのか。」
「そうだ。まだ行くぞ！ピジョット、つばさで…！ムクホークがいない。」
「今だ！はがねのつばさ！」
　そして上空からムクホークが急降下してピジョットに向かってまっすぐ飛んできた。
「かげぶんしんを上手く使ったな！だがまだ甘い。ピジョット、みきり、そしてエアカッター！」
　ピジョットはムクホークの攻撃を紙一重に躱し、ムクホークの背中にエアカッターを放った。ムクホークは躱す事が出来ず地面に落下してしまった。
「ムクホーク！大丈夫か？」
「ムクホー！」
　ムクホークはすぐに起き上がり飛び上がった。
「そのムクホークは随分鍛えられているな。流石と言ったところだ。」
　流石…やはりこのトレーナーは俺の事を知っているのか…
「だが力の差は明らかだ。いい加減ビリジオンを渡して貰おう。私が用があるのはアオト、お前ではない！」
　！今、確かに俺の名前を言った。
「お前はいったい誰なんだ。何で俺の事を知っている？」
「そうか…確かにこれだとわからないよな。」
　するとそのトレーナーは体を覆うようにまとったマントのパーカーを頭の後ろに降ろし緑色の髪の毛が出てきた。そしてゴーグルを外すと俺は言葉を失った。
「久しぶりだな…アオト。少し見ない間に随分でかくなったな。」
「リョ…リョクト兄さん？」
「あぁ、他に誰がいる…」

俺は目の前の現実を受け入れられずにいた。
「リョクト兄さん、やっと会えて嬉しいよ…でも何で森のポケモンを怖がられせてまでこのビリジオンを狙うの？」
「お前には関係ない…と言いたいが言っても無駄だろう。俺はそのビリジオンに聞きたいことがある。ただそれだけだ。」
「聞きたいこと？」
「おい！ビリジオン、今俺の質問に答えればすぐにでも手を引いてやる。テラキオンはどこにいる？」
「テラキオン？」
それがリョクト兄さんがポケモン達を怖がらせてまで探しているポケモンなのか。
「テラキオンの場所は知らないと何度も言っている。」
ビリジオンの声が頭に響いた。
「嘘をつくな！本当の事を話させてやる、ピジョットつばさで打つ！」
「ムクホーク、はがねのつばさ！ビリジオンを守れ！」
ピジョットのつばさ打つに向けてムクホークのはがねのつばさをぶつけピジョットの攻撃を阻んだ。
「アオト…邪魔をするなと言ってるだろ！」
「……リョクト兄さんはテラキオンの居場所をしるためだけに森のポケモン達を怖がらせたの？」
「・・・・仕方なかったんだ。」
「仕方なかった…かリョクト兄さん悪いけど俺は納得できない。」
「納得してもらうつもりもない。アオト、これ以上邪魔するならお前から片付ける。」
「臨むところだ。リョクト兄さん！」
「そうか…兄弟のお前とは本気で戦いたくないと思ったが仕方ない。ピジョット、せめてもの情けだ。一撃で決めるぞ。ゴットバード！」
「ムクホーク、全ての力をこの技に…ギガインパクト！」
二匹は大空に高く飛び上がり一気に急降下した。ピジョット、ムクホークは互いに黄金のオーラを纏い徐々に接近していった。この一撃で決まるだろう。

「アオト…戦いは先に熱くなった方が負ける。冷静であれって俺が教えた事覚えているか？」
　それはもちろん俺も覚えていた。旅を出る前にリョクト兄さんが最初に教えてくれたいいトレーナーになる教えの１つだ。
「もちろん覚えているよ。最初の教えだから。」
「そうか…なら俺の戦い方を考えたうえでギガインパクトを指示したんだな？」
　うん？何を言ってるんだ…戦い方？……!!？
「まさか…まずい！」
「やはり冷静ではなかったようだな！もう遅い！ピジョット、スピン＆リターン」
　ピジョットはムクホークと接触する直前に全身を回転させ紙一重で避けた。そして再びムクホークに向かって行った。ムクホークはギガインパクトの反動で動けず飛ぶ事を維持するだけで精一杯だった。
「ピジョット、その動けないムクホークにギガインパクトだ！」
　ピジョットはそのままムクホークに向かってギガインパクト。ムクホークは躱すことができずに飛ばされアオトの近くにある木に衝突した。ムクホークはそのまま地面に落ちて目を回してしまった。俺は急いでムクホークをボールに戻した。
「勝負あったな、アオト。冷静な判断ができない今のお前が俺に勝てるわけないだろ。」
　くそっ言い返すことが出来ない。
「さてビリジオン、もう一度聞こう。テラキオンはどこだ。」
「…知らないと言っている。」
「そうか…なら仕方ない！ピジョット、エアカッター！」
　ピジョットは俺たちに向けてエアカッターを飛ばした。まずいと思いラグラージを出そうとしたが間に合わない事は目に見えていた。どうすれば…
「ラル～！」
「ラルトス！」

ラルトスがバックから飛び出してエアカッターの進路上に立ちふさがったのだ。
「やめろ、ラルトス！…くっそ間に合え！」
俺は飛び出したラルトスを後ろから抱きかかえた。そしてすぐに体を後ろに向けた。これならラルトスを守ることが出来るからだ。そして俺はエアカッターを受ける覚悟をした。だが突然謎の光が突然俺を包んだのだ。俺は突然の光で目を開けることができなくなった。